

令和3年度あしたのまち・くらしづくり活動賞 総務大臣賞

”なんか楽しそう“をつくり出す

青森県八戸市 八戸市中心街 まちぐみ

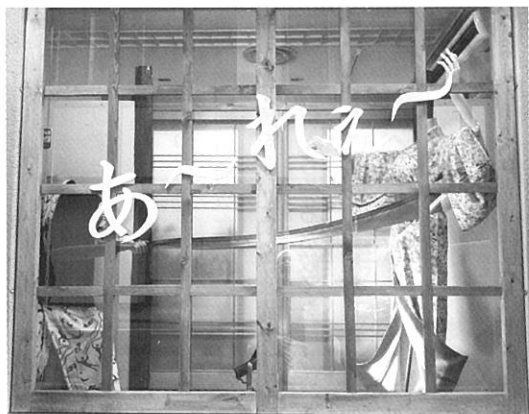
八戸市中心街「まちぐみ」は、八戸市の施設「八戸ポータルミュージアムはっち」（以後ははっちとする）の事業として2014年発足。アーティスト山本耕一郎を組長として、市民が主役になって、まちなかに「なんか楽しそう」を作り出す活動を続けている。

一番最初にやったのは、中心街のお店のディスプレイや外観を、少しでもかっこよく、面白くする「お店プロジェクト」だ。

やりたいことを「素早く形にして成果を示す」という戦術で、市民の関心を集め、動線を変え、お店とお客さんとの交流を生んだ。ユニークでキャッチーな成果は、まちぐみ組員になりたいという市民を増やし、組員数は活動1年足らずで100人を超えた。

一軒一軒お店に足を運んでお願いして回る

ことで、商店街との信頼関係を構築し、その後の活動にも好影響を及ぼした。特に昨年度実施した「ブルーフラッグプロジェクト」で



志村けんさんのコントでお馴染みの「あ〜れえ〜」のシーンを着物屋さんのディスプレイに

は大きな力となった。

このプロジェクトは、コロナ禍のエッセンスシャルワーカーへの感謝の気持ちを、手作りフラッグに込めて目に見える形で伝えるため、共感してくれた中心街のお店約150店舗に飾るといったもの。

“おうち時間”が増えた市民が自宅で参加できるように、不要になった青色の衣類やハギレでフラッグを作り寄付してもらった仕組みで、地元高校生が毎週100枚のフラッグを寄付して設置作業にも参加してくれたり、心温まるお手紙を添えて寄付してくれる市民も多くあった。

メディア効果もあり、中心街から少し離れたお店や学校、個人宅でも、手作りのブルーフラッグを飾る動きも生まれた。対面ではな



くても、市民とつながっていることを実感できたプロジェクトだった。

「既存の組織を使わず、小さなお金で大きく動かす」やり方は、物事を素早く立ち上げ、いち早く成果を出す秘訣であり、まちぐみの常套手段である。

その軸になる考え方が二つある。

一つ目は、まちや社会の現状を感じ、まちの問題・課題を見つけ、そのために自分たち市民には何ができるか、今何をすべきなのかを考え動く「問題解決型」。

二つ目は、これをしたらもっと楽しいまちになる、自分はこのコトを実現させたいなど、夢や妄想から出発する「未来志向型」。



週100枚の手作りフラッグを寄付して、設置作業にも参加してくれた高校生たち



子どもから大人まで、10分でも3時間でも、都合に合わせて市民が参加して、バトンをつなぎながら1脚を仕上げている

「お店プロジェクト」は、魅力が減少している中心商店街の課題と、こんなお店があったら楽しいなという未来志向の発想から生まれた。また「ブルーフラッグプロジェクト」も、暗く冷たい社会の空気を課題として、心温まる空気に変えたいという未来づくりの発想からスタートしている。

5年目となる「はっちのイス」に南部ひしごし「は、はっちの備品の椅子に通りがかりの市民や観光客がバトンタッチしながら南部菱刺しの模様を直接施すもの。完成した椅子はその後もはっちで使用され、多くの人に南部菱刺しの魅力を発信し続けている。同時に、作業に参加した市民にとって、「自分が関わっ

た椅子があるはっち」が「自分ごと」になるという効果も狙ったものだ。

つまり、地域の伝統「南部菱刺し」の継承という課題に対して、まずは知り、体験できる機会を設ける課題解決と、はっちの備品が「市民の手で作られている」状況と、「市民が自慢したくなる」場所を作る未来志向のプロジェクトだ。

毎月第3日曜日に固定し、通りがかりの誰でも参加できる仕組みにすることによって、宣伝しなくてもリピーターや南部菱刺しファンが増えていった。東京からこのイベントに合わせて八戸観光に来たという方もいたり、ここでの体験がきっかけで、南部菱刺し教室



出店時、自分たちで作ったオリジナル屋台の前で自分たちの商品をPRする高校生たち

に通い始める市民もいた。

地元高校生との活動「高校生とつくる南部せんべいカフェ」（以後、セカフェとする）も今年で5年目となる。

これは、地域の伝統食「南部せんべい」の文化が廃れ、せんべい屋さんも減っている地域課題を感じ、高校生の発想が南部せんべいの未来を作るきっかけになるのではないかと考えた未来志向型だ。

今までに50人以上の高校生が参加し考案した南部せんべいを使ったスイーツは、試作品も含めて約30品。参加者の賛同が得られ、実際にカフェイベントで販売された作品は12品ほど。

2年目には中心街にあるカフェから、セカフェの商品を出したいという依頼があり、3年ほど提供した。

昨年はセカフェの商品を真似たものを提供するカフェが現れた。このような動きがもっと増えることを夢見て活動継続中だ。

セカフェにはひとつの大きな目的がある。それは卒業後、外に出て行ってしまおう若者が出て行ってしまいう前に、地域に暮らす普通の大人たちと関係をつくり、その後もつながり続けることによって、帰省した時などに会いに行ける人、会いに行ける場所を作っておきたいというものだ。

離れていても心の拠り所がある、つまり先



洋服づくりの仕事をしていたという70代の女性はミシン部長として大活躍

生でもない、親でもない、八戸の普通の大人

たちが「心のふるさと」となり、地元に戻る事が選択肢のひとつになるように、高校生と大人が混ざり合い、関係が続くような活動を作っている。

実際に、高校卒業後もまちぐみに、あるいはセカフェに大人組として関わっていたり、帰省するたびにまちぐみに顔を出して近況報告をしてくれる卒業生も多い。活動拠点の「まちぐみラボ」が「いつも帰って来られる場所」「ここにも良いんだと思える場所」としてすっかり定着している。

就職などの転機に、まちぐみのことを思い出し、連絡をくれる大学生も多い。

コロナ禍でも、オンライン定例会に遠方から参加してくれる大学生も多く、つながりが

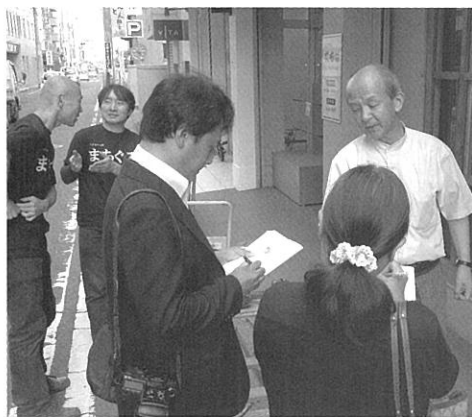
見える化されることで、八戸の組員の中でも距離が縮まって親近感が増しているようだ。

まちぐみは、自分の得意なことで活動に参加する市民集団。ペンキ塗りや工作、裁縫に料理、アイデア出しなど、誰でも無理なくできることは何かあるはずで、一人ひとりの力は小さくても、それが集まれば大きな力になる。お互いが補い合いながらひとつの目標に向かって活動している。

「自分たちのまちは自分たちでよくしていこう」という風土づくりであり、意識変革、自分発見の場でもある。

地域づくりとは、「一人ひとりが自分の個性を生かして地域や社会に貢献しイキイキと生きること」だと考えている。

（八戸市中心街まちぐみ 組長 山本耕一郎）



新聞社3社の取材に応じる着物店社長 普段あまり注目されないお店が話題になり、社長の意識も変わったのか、この後スーツをやめ、和服姿で店に立つようになった